がんの痛みの治療に用いる医療用麻薬 ～一人一人に合った使い方で痛みのない毎日を～

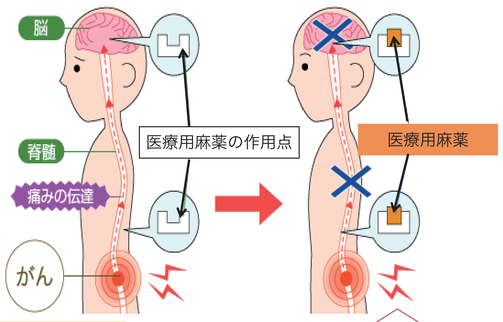
Narcotic Analgesics to Treatment of Cancer Pain

医療用麻薬の原料（ケシの果実）

1986年にWHO（世界保健機関）は世界共通のがんの痛みの治療指針を発表しました。がんの痛みの治療の中心となる薬剤として、モルヒネ、オキシコドン、フェンタニルなどの医療用麻薬があり、現在までに様々な製品が開発されてきました。医療用麻薬はがんの痛みの治療に使用しても、やめられなくなったり、寿命が縮まるようなこともない、有効性の高い痛み止めです。医療用麻薬は最後の手段ではなく、がんの進行度に関わらず痛みの程度に応じていつでも使われます。痛みをとることで、よく眠れるようになったり、がんの治療に前向きに取り組めるようになります。がんの痛みの治療のゴールは、普段の生活を取り戻すことにあります。

医療用麻薬の作用

医療用麻薬は、痛みを伝える脊髄の神経や痛みを感じる脳の部位に作用して強い痛みをやわらげます。



イブプロフェンなどの解熱鎮痛薬は、主に痛みのある場所に直接作用して、痛みを取り除きます。

がんの痛みに関する緩和ケアサイト がんの痛みネット より引用一部改編

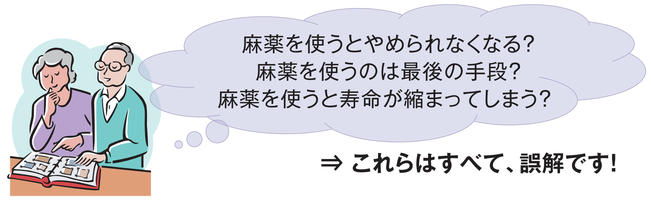
代表的な副作用

医療用麻薬の副作用は主に便秘、吐き気、眠気です。
副作用でつらい思いをしないようにあらかじめ下剤や吐き気止めなどを使ったり、必要に応じて医療用麻薬の種類を変えることで、副作用をコントロールできます。

医療用麻薬と不法麻薬の違い

医療用麻薬
- 有効性・安全性が確認され 国が承認した薬です
- 必要な方に医師（麻薬施用者）が処方します
- 手術の麻酔やがんの痛みの ような強い痛みに使用します

不法麻薬
- 売買や使用が法律で禁止され、違反者は処罰の対象になります
- 幻覚や妄想、依存を 引き起こす恐れがあります



⇒ これらはすべて、誤解です!

入院・外来通院・在宅療養まで

がんの痛みの治療に用いる医療用麻薬には、飲み薬や貼り薬、坐薬、注射薬があります。注射薬の場合でも、携帯装置を用いることで自宅や介護施設など での療養時にも使用できます。
在宅での注射薬の準備に対応できる保険薬局が増えてきています。

携帯型精密輸液ポンプ　小型シリンジポンプ　インフューザーポンプ

痛みが強いときには、ボタン一つで痛み止めを追加する機能（PCA機能*）を持った装置もあります。

*Patient-controlled analgesia：患者さん自身が痛みに合わせて痛み止めの量を調節する方法

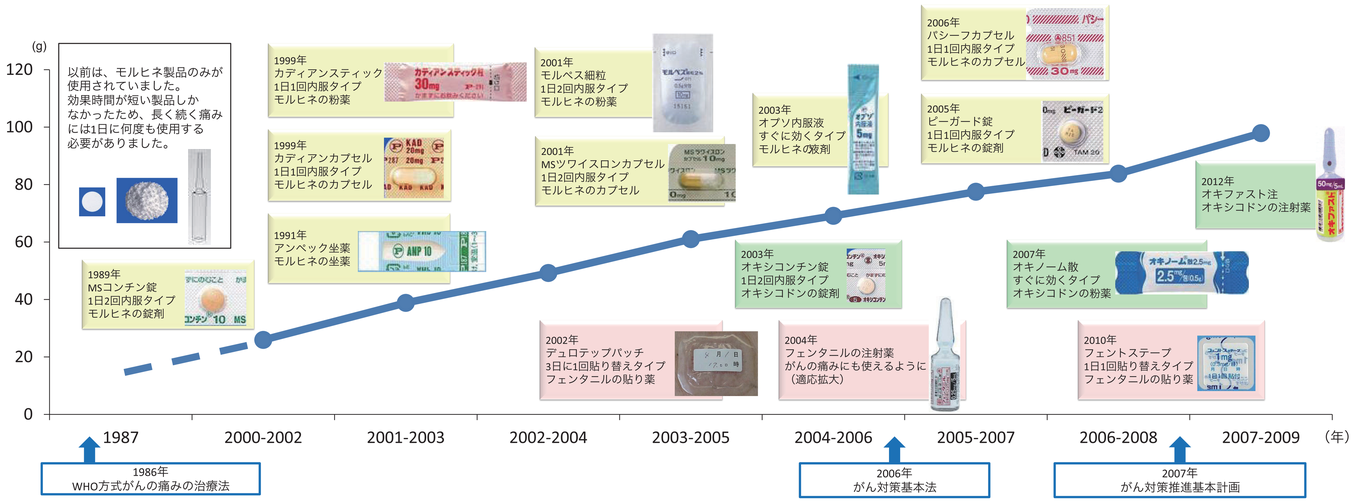
痛みはご自身にしかわからないものです。がまんしないで伝えることが重要です。

医療用麻薬の製品開発と消費量の推移

がんの痛みの治療のニーズに合わせて様々な医療用麻薬の製品が開発されてきました。患者さんの負担が少なくなるように、1日1回または2回の使用でも痛みのコントロールができるような効果の長い製品や、注射薬や錠剤、粉薬だけでなく、坐薬や液剤、貼り薬といった形の工夫も行われています。

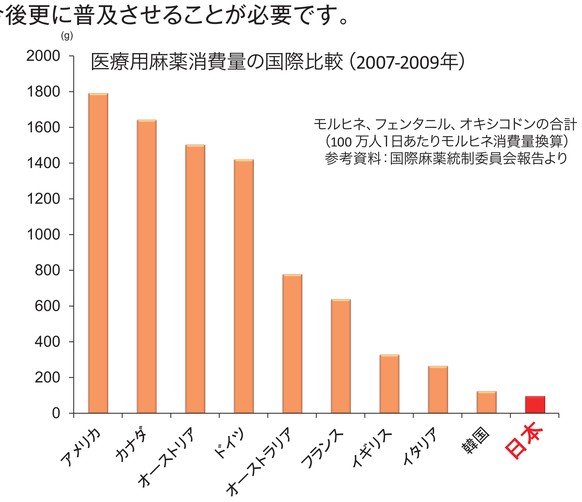
- モルヒネの製品
- オキシコドンの製品
- フェンタニルの製品

日本における医療用麻薬消費量推移
モルヒネ、フェンタニル、オキシコドンの合計（100 万人 1 日あたりモルヒネ消費量換算）



消費量の国際比較

日本の医療用麻薬の消費量は、先進国に比べると極端に少なく、がんの痛みの治療が不十分と考えられています。
今後更に普及させることが必要です。



国立がん研究センター中央病院 薬剤部・緩和医療科